

日本語のヨ・ネとスペイン語表現

三 好 準 之 助

目 次

1. はじめに
 - 1.1. 現代語ヨ・ネの国語辞書的な意味
 - 1.2. ヨ・ネの使い方について
 - 1.3. ヨ・ネのスペイン語との対照のいくつか
 - 1.3.1. 和西辞書の記述
 - 1.3.2. スペイン語話者への日本語教材
 - 1.3.2.1. Planas *et al.*
 - 1.3.2.2. Matsuura *et al.*
 - 1.3.2.3. AJALT
 - 1.3.3. 野村（2014）の対照研究
 - 1.3.3.1. 日本語のヨ・ネ
 - 1.3.3.2. スペイン語の間投詞
 - 1.3.3.3. 野村の対照表
2. ヨ・ネの解釈について
 - 2.1. ヨ・ネの文法的な位置づけ
 - 2.2. 日本語教育の現場の解釈
 - 2.2.1. 大曾（1986）
 - 2.2.2. 伊豆原（2003）
 - 2.2.3. 守屋（2006）
 - 2.3. 意味の観点からの解釈
 - 2.3.1. 益岡（1991）
 - 2.3.1.1. 一致型の判断と対立型の判断
 - 2.3.1.2. 疑似的一致型の判断
 - 2.3.1.3. ヨ・ネと丁寧体
 - 2.3.2. 日本語記述文法研究会（2003）
 - 2.3.2.1. 終助詞ヨ・ネのモダリティ
 - 2.3.2.2. ヨの意味
 - 2.3.2.3. ネの意味
 - 2.3.3. 滝浦（2008）
3. ヨ・ネに関する筆者の仮説と検証
 - 3.1. ヨ・ネの機能に関する仮説
 - 3.2. ヨ・ネの仮説の検証
 - 3.2.1. 国語辞書的な意味について（1.1.）
 - 3.2.2. ヨ・ネの使い方についての検討（1.2.）
 - 3.2.3. 日本語教育の現場の解釈について（2.2.）
 - 3.2.3.1. 大曾（1986）の見解（2.2.1.）について
 - 3.2.3.2. 伊豆原（2003）の見解（2.2.2.）について
 - 3.2.3.3. 守屋（2006）の見解（2.2.3.）について
 - 3.2.4. 意味の観点からの解釈につて
 - 3.2.4.1. 益岡（1991）の解釈（2.3.1.）について

- 3.2.4.2. 日本語記述文法研究会 (2003) の解釈 (2.3.2.) について
- 3.2.4.3. 滝浦 (2008) の解釈 (2.3.3.) について
- 3.3. ヨ・ネとスペイン語との対照について
 - 3.3.1. 和西辞書の場合 (1.3.1.)
 - 3.3.2. スペイン語の教材の場合 (1.3.2.)
 - 3.3.2.1. Planas *et al.* (1993) の場合 (1.3.2.1.)
 - 3.3.2.2. Matsuura *et al.* (2000) の場合 (1.3.2.2.)
 - 3.3.2.3. AJALT (2000) の場合 (1.3.2.3.)
 - 3.3.3. 野村の対照研究 (2014) について (1.3.3.3.)
- 4. ヨ・ネと対応するスペイン語表現に関する提案
- 5. おわりに

要 旨

日本語には付属語のなかで活用しないものが助詞と呼ばれている。不変化詞である。助詞のなかには、文の終わりに付いて命令・願望・疑問・感動・強意などの意味を加える終助詞がある。その終助詞のなかにヨ・ネが含まれている。本稿では、まず、ヨ・ネに関して、国語辞書的な語義、使い方に関する諸制限、和西辞書、スペイン語話者のための日本語教材、日本語のヨ・ネとスペイン語の間投詞との対照研究を検討する。つぎに、ヨ・ネに関するこれまでの研究を概観し、語用論的な観点からその機能に関する合理的で統一的な仮説を提示する。そしてその仮説に従いつつ、ヨ・ネに対応するスペイン語表現にはどのようなものがあるのかを検討して提案する。

キーワード：終助詞，間投詞，話し相手中心主義，談話標識，ウチ・ソト

1. はじめに

日本語には付属語のなかで活用しないものが助詞と呼ばれている。不変化詞である。助詞のなかには、文の終わりに付いて命令・願望・疑問・感動・強意などの意味を加える終助詞がある。その終助詞のなかにヨ・ネが含まれている。本稿は、不変化詞ヨ・ネの機能を再検討し、その機能に関する合理的で統一的な仮説を提示し、その仮説に従いつつ、ヨ・ネに対応するスペイン語表現にはどのようなものがあるのかを検討して提案することを目的とする。

筆者は以下のような動機でこのテーマの研究に着手した。

国立国語研究所の野田尚史教授が2013年12月21日に東京外国語大学で開催された「外国語と日本語との対照言語学的研究」第11回研究会で「日本語とスペイン語のとりたて表現」という題で講演された。そのハンドアウトの7頁に「高コンテキスト言語と低コンテキスト言語の問題点」という項があるが、そこで以下のように述べられている。

今井 (2011) は、英語の (34) のような答え方は、日本語では (35) のように不自然で、(36) のように理由だということを表す表現を入れる必要があることを指摘している。英語で

は、実際に口に出す以上の意味を聞き手に伝えようとし、聞き手が推論することを期待すると述べている。

(34) Q: Is Jane a good cook? (ジェインは料理が上手かい?)

A: She's English. (ジェインはイギリス人だよ。)

(35) Q: 寿司はお好きですか。

A: 私は日本人です。

(36) A: ええ、そりゃまあ日本人ですから。

(34) の英語での答えも (35) の日本語での答えも、肯定の伝達文である。しかし英語での答えの和訳は「ジェインはイギリス人だ」ではなく、「～だよ」と、ヨが付加されているのに、他方、(35) の日本語の答えは「～です」と言い切っている。(35) の問いかけをした日本人が、その A のような答えを受けて、はたして文字通りの意味しか理解できないであろうか。(35) の答えは、少なくとも筆者の日本語話者としての経験によれば、(36) よりも洗練された答え方であり、聞き手には十分推論できると思われる¹⁾。さらに、(35) の答えが英語の答えの和訳と同じようにヨを伴って「私は日本人ですよ」であれば、答えた者の伝えたい内容は十二分に推論可能であろう。

このように日本語のヨには、不思議な機能がありそうである。本稿では、このヨと、それに類するネについて検討し、これらの機能がスペイン語のどのような表現に対応するのかを探ってみることにする²⁾。

1.1. 現代語ヨ・ネの国語辞書的な意味

現代日本語では、不変化詞ヨ・ネはどのような意味で使われているのであろうか。それを一般的な国語辞書で調べてみよう。語義記述が比較的詳しい北原の『明鏡』では、以下のようになっている。記述方法は筆者の都合で変更したり、用法などの注意を省略したりすることもある。そしてヨとネの語義の文頭に、本稿で参照するために、ヨ1、ヨ2、ネ3、ネ4のような記号を加えた。以下のように、ヨについては6種類、ネについては7種類の語義がある³⁾。

ヨ1: 終助詞。(文節末に付いて) 確認するような気持ちで相手の注意をひきつけるのに使う。「もしもよ、誰かが来てもよ、絶対に入れないでね」「あなたがですよ、私の立場だったらですよ、どうしますか」。「よう」になることもある。「それからよう、親父が来たらよう、…」。

ヨ2: 終助詞。(文末について) 親しみを込めて、断定・念押し・命令・勧誘・疑問などの気持ちを伝えるのに使う。「そんなことないよ」「きちんと戸締りをするんですよ」「早く来てよ」「一緒に行こうよ」「もう帰るのかよ」。

- ヨ3：終助詞。(疑問の語や質問の文に付いて)質問・反問に詰問・反駁の意を添える。「こんなことしたの誰だよ」「そんなこと言えた義理かよ」。
- ヨ4：終助詞。呼びかけを表す。「君よ、嘆くな」「神よ、助けたまえ」。
- ヨ5：終助詞。詠嘆を表す。「からたちの花が咲いたよ、白い白い花だよ」。
- ヨ6：感動詞。「よう」とも⁴⁾。男性語。気軽に人に呼び掛けるときに発する語。「よう、しばらく」。
- ネ1：終助詞。(文節末に付いて)相手を引き込むような気持ちで注意を引きつけるのに使う。「あのね、私、これがね、ほしいの」「あしたはね、ちょっと都合が悪いんだ」。
- ネ2：終助詞。(文末で、活用語の終止形や終助詞「よ」「わ」などに付いて)相手との共感を表す。「いいお天気ですね」「うまく行ってよかったですね」「うん、これは行けるね」「あなたも苦労したわね」。
- ネ3：終助詞。(文末で、活用語の終止形や終助詞「よ」「わ」などに付いて)依頼や勧誘に親しみの気持ちを添える。「ここで待っててね」「お互いに頑張りましょうね」「またあしたね」。
- ネ4：終助詞。(文末で、活用語の終止形や終助詞「よ」「わ」などに付いて)親しみの気持ちをこめた確認を表す。「出発はあしたでしたね」「痛くないですよね」「いいね、分かったね」。
- ネ5：終助詞。(文末で、活用語の終止形や終助詞「よ」「わ」などに付いて)ぞんざいに言い放つのに使う。「私なら、そんな言い方はしないわね」「そんなこと知らないね」。
- ネ6：終助詞。(質問の文に付いて)質問・確認・反問・疑念などに尊大さを添える。「今日は何日かね」「明日は来てくれるかね」「そんな手にだれが乗りますかね」。
- ネ7：感動詞。「ねえ」にもなる。親しみを込めて、相手の注意をひきつけるのに使う。「ね、こっち向いてよ」「ね、いいでしょ?」。

1.2. ヨ・ネの使い方について

まず、ネ・ヨは日本語の話しことばに特有の念押しの気持ちを表現する手段であるという特徴を確認しておこう。この点に関して、森田良行(2006: 2)は以下のように指摘している。

一般に今の日本語は言文一致だと思われているが、決してそうではない。不特定多数を読み手として想定する書き言葉(文章)と、特定の相手に話し掛ける話し言葉(談話・会話)とでは、発話の発想が根本から異なる。談話では、常に聞き手を意識して、その聞き手に対して念を押すようにしながら話を先へ先へと進めていく。途中で相手が理解にとどこおれば、会話は先へ進まない。その念押しの気持ちが「～ね」や「～よ」のいわゆる間投詞

として発話の節々に現れる。だから、留守番電話などで一方的にしゃべりまくらなければならない、念押しのお機嫌の無い発話では、どうしてもごちない不自然な話し方とならざるを得なくなる。日本語の発話は、相手を聞き手として設定し、その相手と自分との関係を常に意識しながら言葉選びをしていく、はなはだ人間的な言語だと言っている⁵⁾。

さて、益岡によれば、不変化詞ヨ・ネは聞き手に対する話し手の文伝達の態度を表すモダリティの表現形式であり、「これらの形式は、聞き手に伝えたい事柄の内容には無関係であり、取り除いても伝達内容の量はいささかも減じない。伝達内容から独立しているということは、また、これらの形式が対話文の表現類型のすべてのものに現れ得るということの意味する」(益岡 1991: 92-93) という。

ここでは逆に、ヨ・ネが使いづらい(使うと不自然な発話になる、使わなければ不自然になる、など) 応答のいくつかを挙げておくことにする。なお、例文の番号は引用文献のものではなく、筆者のものである。

A. 命令形との共起

野田春美 (2002: 265) によれば、ヨは独話を除いて幅広く色々な形に接続できるし、ネも独話と命令形「行けー」以外の多くの形に接続することができる。この指摘から、ネは命令形には接続しない(ヨは命令形にも接続する)、という基本的な使い方がわかる。

B. 同意を求めるネへの返答

大曾 (1986: 91) によれば、同意を求めるネには、その答えもネであるのが自然な日本語の会話である。

1 「今日はいい天気ですね」「そうですね」

～ネで話しかけられたら、～ネで答えるのが自然であることが多い、ということである。

他方、Mizutani *et al.* (1982: 38-39) は、同意を求めるネで話しかけられてヨで答えるのは、ヨが話し相手の考えていそうなことには無関係に話し手自身の判断を強く肯定するときに使われるから、信頼関係を損ねる危険性を帯びている、と指摘して、ヨ・ネの使い方に注意を喚起している。たとえば、朝早くに出会った友人同士で

2A 「早いですね」「ええ、そうですね」

2B 「早いですね」「そうですよ (?)」

C. 確認を求めるネへの返答

しかし大曾 (1986: 91) はまた、レストランでウェイトレスが注文を確認するときのような、

確認を求めるネへの返答には、ネが付かない方が適切であるという。

3 「ハンバーグ定食二つにグラタン一つでございますね」

「はい、そうです」

D. 使用が奇妙に感じられるネ・ヨ

金水（1993: 119）は談話管理理論という観点からヨ・ネの意味を検討するときに、ネの使用が奇妙に感じられる例として次の2例を挙げている。

4 「あなたのお名前は？」「中村太郎です（?ね）」

5 「お年は？」「36です（?ね）」

そして「話し手の個人情報のなかでも、ほとんど検索・計算なしに引き出せるような情報ではネをつけると奇妙な感じがする」と述べている。このような応答の場合、答えにヨが使われても奇妙な感じになるであろう。

他方、金水は同じところで、以下のような応答では、問いに答えるのに「何らかの検索・計算過程を必要とするような情報では、ネが自然に使える」という。

6 「勤めて何年目ですか」「もう20年になりますね」

7 「お子さんの年齢は？」「もうすぐ、12ですね」

E. ～ヨの文への応答

～ヨの文で情報を提供された時には、次の8Aや8Bの返答が自然であり、～ヨの文で答える8Cは不自然である。

8A 「バスが来ましたよ」「ああ、来ましたか」

8B 「バスが来ましたよ」「ええ、来ましたね」

8C 「バスが来ましたよ」「ええ、来ましたよ(?)」

F. 任意要素としてのネ

神尾（1990: 65）は、相手が知らない情報にもネが付く例として、次の用法を紹介している。店員と客とのやりとりの

9 「これ、おいくらですか?」「600円ですね」

このような聞き手の縄張りに属さない情報につけられるネは「仲間意識または連帯感を表現して、発話に丁寧さを加える働きを持つ」と解説している。他方、滝浦（2008: 145）はこのようなネについて、「相手の同意を見なす用法、ないし、相手の共有を促す用法とみることができる。間投助詞的に用いられる『ね』も同類で——現れる位置が終助詞とは異なるが機能的には変わらない——」あると指摘している。

G. ヨの使用制限

ヨについて、野田春美（2006: 1 頁目）に、日本語教育者としての興味深い指摘がある。「『よ』は、『ね』に比べて、使わないと不自然になる場合が少ないこと、目上の人に使うと失礼になりやすいことから、あまり積極的に教えられず、習得も遅いようです。目上の人に使うと、どうして失礼になりやすいのであろうか。」

1.3. ヨ・ネのスペイン語との対照のいくつか

日本語のヨ・ネは終助詞の一部であるとされる。「文章語を主たる対象とする伝統的国語学では、現代語の終助詞はさして重要な研究対象とは見なされなかったが、『日本語らしく』しゃべるためには終助詞を正しく使うことが大切な鍵をにぎるということが、まず日本語教育の現場で把握された。[...] その後は日本語教育の領域にととまらず、一般的な言語学的研究の対象として記述と理論の整備が進められている」⁶⁾。

そこでこの節では、まず和西辞書の記述、つぎに日本語を外国人に教えるための教材のなかに見られるヨ・ネとスペイン語表現との対応、さらに最近発表されたヨ・ネとスペイン語間投詞との対照研究を紹介しよう。

1.3.1. 和西辞書の記述

3種類の和西辞書を調べてみた。小池ほか（2014）、有本ほか（2001）、上田ほか（2004）である。ヨは3種類とも見出し語になっていないが、ネについてはそれぞれの方法で記述されている。

辞書の性格にもよるが、一番簡単な記述は小池ほか（2014）である。ここでは「(付加疑問を作る) ¿verdad?, ¿no?; (念押しに用いる) ¿eh?」と記述され、例文が付けられている。

有本ほか（2001）はもう少し詳しく、「1 [付加疑問] …¿verdad?/ [主に肯定文の後で] …¿no / no es cierto / no es así?」という説明があり、例文が添えてあるが、そのなかに「あなたは行くのでしょうか」Usted irá, ¿no? / ¿Verdad que irá usted? がある。それに続いて「2 [念押し] ね、上手でしょう [私は] ¿(Lo)Ves?, lo hago muy bien.」という語義が出されている。

3種類の辞書のなかで一番詳しいのは上田ほか（2004）である。この辞書では、まず「ね」という見出し語で「-ね ¿no?, ya sabes. → ねえ」の記述があり、見出し語「ねえ」で詳しい説明がある。「ねえ」には2種類の見出し語があり、まず「ねえ」では「[注意喚起] (口語) oye, (口語) mira; [呼びかけ] (口語) pero bueno, (口語) vamos a ver, (口語) hombre, (口

語) mujer, (口語) venga, (口語) vamos ; [懇願] por favor ; [表現をやわらげて] ¿entiendes? という説明があって、その後に例文が並んでいる。2番目の見出し語は「-ね(え)」であり、「① [相手の同意を求めて] ¿verdad?, ¿a que sí?, [ラブラタ] ¿no es cierto?, ¿de acuerdo?, ¿entendido?, [スペイン] ¿vale? ; (否定文の後で) ¿a que no?」として例文が続いており、さらに「② [相手に確かめて] ¿no?, ¿verdad?, creo que..., me parece que...」という説明と共に例文が提示されている。

1.3.2. スペイン語話者への日本語教材

日本語をスペイン語話者に教えるための教材も、すでに色々出版されている⁷⁾。筆者が本稿で提示したい「日本語のヨ・ネに対応するスペイン語表現」がどのように示されているか、教材のいくつかを調べてみた。

1.3.2.1. Planas *et al.*

1993年に出版された Planas *et al.* では、ヨもネも43課の「特徴付けの語尾」*Términos de matización* で扱われている。ヨについては「文末語としてとても頻繁に使われ、(スペイン語の que sí, hombre; pues claro; sí, sí, de veras のように) 一種の強調の意味を添える」と説明されている(1993: 510)⁸⁾。また、ネについては対応するスペイン語表現を紹介するような説明はない。しかし次のような文単位の対応は示されているので(1993: 508)、日本語をローマ字から仮名に変えて引用しておこう。

- 17 いいよ。Está bien (de acuerdo; vale así).
- 18 行ってくるよ。Me voy un rato (a la calle, o así).
- 19 いらんよ。No, no me hace falta. (No, qué va, no lo necesito.)
- 20 いらんんだよ。Que no lo necesito, (hombre).
- 21 たくさんあるんだよ。¡Si hay muchísimo!
- 22 そう言ったよ。Eso dijo, (sí señor).
- 23 そうなんですよ。Exactamente, ésa es la cosa. (Así es.)
- 24 たのむよ。Te lo ruego, hombre (anda, sé bueno, es un favor que te pido).
- 25 残念ですね。Caramba, ¡qué lástima! (¿verdad?)
- 26 お上手ですねえ。¡Qué bien se le da, eh! (lo hace Vd. estupendo).

例文17から24までがヨの例文、25と26がネの例文である。Planas *et al.* は説明の段階で、ヨは強調の意味を添えるとしてそれに対応するスペイン語表現を指摘しているが、文レベルの対応では8種類の例文の中で20に hombre, 22に sí señor を、選択可能という意味で括弧の中に入れて提示している。そしてネでは25で選択肢として ¿verdad? をカッコに入れ、26では文末に ¡eh! を加えている。

1.3.2.2. Matsuura *et al.*

Matsuura *et al.* は2000年に出版されたが、ヨ・ネは小辞 *Las partículas* の課で扱われている。ヨについては、勧告の文に独特の文末小辞であり、命令・懇願・勧誘（例文27）、話し相手に情報を与える意図（28）、感情（29）を表現する、と説明されている（2000: 91）。

27 行こうよ [sic]。¡Vamos!

28 私も行きますよ。¡Yo también voy!

29 いやだよ。¡Qué rabial!

そしてネについては、話し手が話し相手も同じことを考えていることを期待している、ということを示している、とするが（30）、ほかに質問・確認（31）、命令・断定（32）、呼び掛け（33）のために使われる、と説明している（2000: 90）。

30 いいですね。Qué bien, ¿verdad / no?

31 わかったね。Lo has entendido, ¿verdad?

32 泣かないでね。No llores, ¿eh?

33 ね、ね、ちょっときいて。Oye, oye, escucha.

この教材では、ヨについては日本語文の全体の意味をスペイン語文に対応させていて、ヨに対応するスペイン語表現を示していないが、ネの場合、文末に付加される時には付加疑問の ¿verdad?, ¿no? や間投詞の ¿eh? が対置されており、文頭に付加される時には間投詞の oye が対置されている。

1.3.2.3. AJALT

この教材は英語を使って日本語を教えるために日本で出版されたものであるが、そのスペイン語版が2001年にスペインで出版された。ヨ・ネは第9課で扱われている。ヨについては、話し手が、話し相手は知らないと考える情報について注意を喚起するために文末に加える小辞 (*partícula*) であると説明され、ネについては、文末におかれる小辞であって、スペイン語の ¿verdad? とか ¿no es así? という表現と同じように、相手はその説明に従うことの確認を求めている、と説明されているが、さらに、ヨは単に肯定し、ネは質問する、という説明も加わっている（2001: 73）。日本語の質疑応答のダイアログがスペイン語と対応させられているので、その一部を紹介しておこう。

34 ええ、ありますよ。Sí, la hay.

35 あそこに…がありますね。Allí hay un …, ¿verdad?

36 (～が) わかりますよ。… lo verá (comprenderá / se dará cuenta).

この教材でもヨに対応するスペイン語表現は提示されていない⁹⁾。

1.3.3. 野村 (2014) の対照研究

この節の冒頭で紹介したように、ヨ・ネを始めとする終助詞が日本語の談話で重要な役割を担っていることが、まず日本語教育の現場で認識されたが、その後は日本語教育の領域にとどまらず、一般的な言語学的研究の対象として記述と理論の整備が進められている。日本語とスペイン語の対照研究の分野でも、最近、ヨ・ネとスペイン語の間投詞とを対照する研究が発表された。2013年度末に神戸市外国語大学に提出して博士の学位を授与された野村の論文『スペイン語における情報伝達の方策』である。野村は、ヨ・ネについては最新の記述と理論を紹介してそれに従っており、スペイン語の間投詞については用例を詳しく分析して微妙な意味の差異を明らかにし、ヨ・ネの用法と対応させている。「聞き手中心の言語運用を行うとされる日本語と、内容伝達中心の言語運用を行なうと考えられるスペイン語を対照することにより、両言語の情報伝達時における特徴を解明したい」(2013: 3) という目的で書かれた。野村は日本語の終助詞ヨ・ネの記述に22頁が使われ、スペイン語の間投詞の記述に198頁が使われていることから、この論文はスペイン語の間投詞に関する考察が中心になっていることがわかる。

1.3.3.1. 日本語のヨ・ネ

野村は終助詞ヨ・ネに関して、これまでに発表されたさまざまな資料を検討した結果、「滝浦(2008)は認識の一致・不一致節や談話管理説では説明できなかった終助詞用法を、実地的に指摘しているように思われる」(2013: 11) としつつ、「本論文では聞き手の存在を意識して『ね』、『よ』を選択する認識(知識)の一致・不一致節を中心とし、スペイン語間投詞と対照することにする」(2013: 13) と断っている。そしてその背景には、日本語の終助詞には聞き手との間に同化できる点があるかどうかを探る「共通点模索型」という傾向がある一方、スペイン語の間投詞には、聞き手との関係性を示すものではなく、話し手の発話態度を言語表現する「視点保持型」の傾向がある、という見方を認める姿勢がある(2013: 12)。

野村はネの用法として、確認・共有・感動詞ネエ・間投詞ネを検討しており、ヨの用法として、聞き手めあて性・情報伝達・注意喚起・含みを持つ用法・話し手の心的態度という用法を検討している。

1.3.3.2. スペイン語の間投詞

対照の相手であるスペイン語の間投詞については、日本語のヨ・ネと「比較しうるスペイン語表現にはどのようなものが考えられるだろうか」と問い、「スペイン語において、終助詞のように命題の表現形式を変えることなく話し手の態度を表明する言語形式として、口語における談話標識が挙げられる」と答えて、「これらの表現と、日本語の終助詞を対照し、対応の

可能性を考察してみよう」という (2013: 26)。

検討された間投詞はスペイン映画 20 本の脚本から収集した 3,461 例である。30 頁に示されている表 2「間投詞の用例数」から分かるように、分析対象となる間投詞は 13 種類であるが、それらが文における位置の文頭・文中・文間、文末・単独に従って分析されている。その使用頻度から判断して、本稿では、段違いの頻度数になった vocativo (2,585 例) 以外の、上位 8 種類 の ¿no? (180), eh (142), mira (137), oye (120), sabe(s) (98), ¿verdad? (84), entiendes (32), vamos (30) を考慮の対象にすることに¹⁰⁾。eh と entiendes は疑問形式にもなる¹¹⁾。

1.3.3.3. 野村の対照表

野村は第 11 章の結論 (2013: 265-8) のなかで、「スペイン語間投詞と日本語終助詞における機能対応のまとめ」と呼ぶ次のような表を提示している。

この表によれば、文頭ではネが、文末ではヨが優勢であることに気づかれる。そして野村は結論の末部で「伝達手段に関して、日本語では聞き手を中心に言語形式を選択するが、スペイン語では話し手がどう伝えたいかを基準にするという類型論的な傾向が明らかになった」と述べている。

位置	機能	スペイン語	日本語
文頭	注意喚起	eh, 呼びかけ語, ¿sabe(s) ?, oye	ね (え), よ
	注視の促し	呼びかけ語, mira, fíjate, verás	ね (え)
	話題維持	ya sabe(s), ya ves	ね (え)
	聞き手 (個人) を特定	呼びかけ語	
文末	確認の要求	¿verdad?, ¿no?, ¿eh?, (単独の ¿ves?)	ね
	聞き手との近さの表明	呼びかけ語	
	注意喚起, 注視の促し	¿eh?, oye, fíjate	よ
	理解の要求	¿eh?, sabe(s), entiendes, ves	よ
	断定	ya verás	よ
	話し手の意見であることの強調的表明	vamos	よ

2. ヨ・ネの解釈について

さて、この章ではヨ・ネに関して、さまざまな分野の研究で示されたこれまでの見解や解釈を検討する。まずその文法的な解釈を確認し、日本語教育の現場の教育経験から生まれた解釈を紹介し、最新の語用論的な解説を紹介することに¹²⁾。

2.1. ヨ・ネの文法的な位置づけ

ヨ・ネの文法的機能は、本稿の 1.1. 節で紹介したように、現代語の国語辞書では終助詞と感動詞に分類されている。

これらの文法用語について、山田の『新明解国語辞典』で提示されている語義を略述すれば、終助詞は「(国文法で) その文の叙述内容についての話し手の感情や、聞き手に対する訴えの気持ちを表わす助詞」; 助詞は「(国文法で) 助動詞と共に付属語として用いられる語類。自立語相互の関係を示したり文の陳述に関係したりする。活用はしない」; 感動詞は「(国文法で) 感動・応答・呼びかけなどを表わす言葉。感嘆詞。間投詞」, となる。ヨ・ネは不変化詞であり、間投詞としても働くことがわかる。

他方、佐藤の『国語学研究事典』(1977)によれば、終助詞のヨは「間投助詞から転じて成立した」(1977: 313)ということであるし、間投助詞は「係助詞・終助詞・接続助詞・格助詞などとの区別に曖昧なところがあり、史的展開の問題が多い」(1977: 314)という指摘もある。そして終助詞のネは「江戸時代後期から見え、話しことばに用いられた」(1977: 315)という。

また、通時的な情報も掲載されている小学館国語辞典編集部の『日本国語大辞典』によれば、古くは、感動詞のヨは「①目上の人への呼びかけに対して答える男性の返事¹²⁾。②驚いた時に思わず口をついて出ることば。やっ。③相手に呼び掛けたり訴えたりする時に発することば」となっているし、ネは、終助詞として「文末にあって動詞型活用の語の未然形および禁止の『な…そ』をうけ、他者の行動の実現を希望する意を表わす上代語」であるし、間投詞として「文節の終わりに付けて、相手に念を押し、あるいは軽い感動を表わす」と説明されている。

通時的な文法機能を考慮すると、ヨ・ネは終助詞的にも間投(助)詞的にも働く可能性のあることがわかる。

2.2. 日本語教育の現場の解釈

ヨ・ネに関連して、日本語教育の現場から教授経験に基づいて発信された見解をいくつか見てみよう。

2.2.1. 大曾 (1986)

大曾はネについて、「『ね』は基本的には話し手と聞き手の間に同程度の情報、同じような判断、考えが存在するということを前提とするが、そこには微妙な食い違いがあり、それが返事の仕方に反映すると言えばよいであろうか」(1986: 92)と説明しているが、ヨについては

「よ」には「強調を表す」とか「強く主張する」とかいった意味解釈が与えられているが、とてもこれだけではその用法を十分に理解し、使いこなすというところまではいかない。「ね」が原則として話し手と聞き手の情報、判断の一致を前提とするなら、「よ」は逆に話し手と聞き手の情報、判断の食い違いを前提としているようだ。(1986: 93)

と解釈している。そしてヨ・ネに限らず、日本語の終助詞の外国人による習得が難しい理由として、英語話者を例にとり、つぎのような観察をしている。

英語の会話は相手の心中などにあまり思いをはせず、自分の観察、意見などをそのまま口にするという感が強いが、日本語は相手が自分と同じ意見を持っているかどうか、相手はこれから自分が言うことに関してどのくらい知っているか、などに関する話し手の判断によって微妙に表現の仕方が変わってくる。その話し手の判断の表現を受け持つ終助詞の学習が難しいのは当然であろう。(1986: 92)

日本語と西欧諸語との間にある、発話姿勢の違いに関する鋭い観察である。

2.2.2. 伊豆原 (2003)

伊豆原 (2003) はヨ・ヨネ・ネという終助詞の使い方を検討している。この三者は「発話によって聞き手に話し手と同一の認識を持たせる」機能をもっているが、三者はそのための手続きに違いがあるとし、ヨは「話し手の認識を伝えることで聞き手の認識に何らかの変化をもたらそうとするものであり」、ネは「話し手の認識に聞き手の同意を求め、聞き手との間に共通認識領域を作り出すものである」(2003: 13) とする。

共通認識領域とは、どのようなものを指しているのだろうか。

2.2.3. 守屋 (2006)

守屋は川端康成の『雪国』と Seidensticker によるその英語版 “Snow Country” の会話部分について日本語の終助詞を英語表現と対比している。「終助詞の体系を持たない英語では基本的に対応する形での翻訳は不可能である」(2006: 22) としながらも、ヨやネの英語表現との対応を考察している。そして終助詞の記述に関する疑問点をいくつか提示した (2006: 20)。ヨ・ネについては、「指示の発話行為や、聞き手が未だ認識していないコトガラへの提示には『よ』が、情報共有が想定できる場合の確認や同意要求、及び同意を返答する場合には『ね』が付けられる」などの一般的理解について、「このような情報の角度から終助詞を把握する考え方が終助詞の本質を突いたものであるか」として、疑問がある」として、以下のような問い掛けをしている。最初の2点を引用しておこう。

第1に、例えば「ね」は、「先週もこの電車で会ったね」「そうだったかね。よく覚えてないね」などのように、情報の共有が志向されているとは考えられない場合にも使われており、情報の共有性の角度では必ずしも説明が付かないことがわかる。むしろ、情報が共有できるかどうかとは無関係に、談話や聞き手との関係性を構築し維持する機能を「ね」が担っていると考えの方が自然である。

第2に、聞き手が既に持っている情報や感情などに関する共有認識であるが、「聞き手の情報は本来未確認であり、確認不可能である」という現実と基本的な矛盾がある。我々は聞き手にいちいち同意を確認してから「ね」を使うわけでも、そうでないから「よ」を使

うわけでもない。

疑問の第1点の「談話や聞き手との関係性を構築し維持する機能」とは、どのようなものである可能性があるのでしょうか。

さらに守屋は次のような指摘で論文を締めくくっている (2006: 32)。

終助詞は文末に位置するとはいえ、上昇性のイントネーションで発せられることからわかるように、文を終える機能よりもむしろ聞き手と共に認識しながら、文を超えて談話とその意味を構成する機能を持っているようである。このような終助詞の機能は、日本語の言語化の際の具体的な把握の仕方、聞き手への注目度の高さ、認識、談話構成を聞き手との共同作業としてしようとする志向性などに支えられていると考えられる。

「共同作業としてしようとする志向性」とは、どのような機能なのであろうか。

2.3. 意味の観点からの解釈

ヨ・ネの意味について考察された文献も少なくない。いくつか紹介しよう。

2.3.1. 益岡 (1991)

ヨ・ネが聞き手に対する話し手の文伝達の態度を表すモダリティの表現形式であることは、すでに本稿の1.3.で、益岡を引用して指摘した。

益岡は、ヨ・ネに関するそれまでの研究では用法の統一的説明に成功していないことを指摘し、モダリティの観点から、統一的説明を試みている。これらの終助詞の本質的な機能を明らかにするために、表現形式が本質的に有する意味を「内在的意味」と呼び、それと具体的な表現効果を区別する見方を採用する (1991: 94)。

2.3.1.1. 一致型の判断と対立型の判断

益岡はさまざまな検討を経て、つぎのような結論に到達した (1991: 102)。

「ね」と「よ」という形式が内在的意味として表すのは、自分が有する知識や意向のあり方が聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方と一致する方向にあるのか、それとも、対立する方向にあるのかという点に関する話し手の判断である。「ね」は、一致する方向にあるとの判断、すなわち、「一致型の判断」とでも言うべきものを、一方「よ」は、対立する方向にあるとの判断、すなわち、「対立型の判断」とでも言うべきものを、それぞれ表現する。我々は、自分の知識や意向を聞き手に伝える時、単にその伝達を行なうだけでなく、必要に応じて聞き手の内部世界を顧慮するわけである。このような顧慮は、円滑なコミュニケーションを実現するための大切な工夫の一つであると考えられる。

2.3.1.2. 疑似的一致型の判断

しかし益岡はこの結論に関して、2種類の問題点を提示している。ひとつは、ネの文末での用法にかかわる「一致型の判断」とネが文節末に挿入される間投用法（本稿ではネ1の用法）とのかかわり方である。益岡はこの両者の用法の間にある「相通じるところ」に注目し、終助詞的用法のネが「聞き手の内部世界との一致性の判断を表しているのに対して、間投用法の『ね』は、聞き手の内部世界を自分の内部世界と一体化させよう、調和させようとする話し手の志向性を表現するものと言えよう」と解釈している。そしてネの間投用法を「疑似的一致型の判断」と仮称している（1991: 103）。

2.3.1.3. ヨ・ネと丁寧体

もうひとつの問題は、普通体と丁寧体の区別を表す「丁寧さのモダリティ」との関わりである。益岡（1991: 104）は、「具体的には、普通体の文における方が丁寧体の文におけるよりも『ね』、『よ』が使われる頻度が高いという事実のことである。このこと自体はよく知られている事であろうが、その理由がどこにあるのかはあまり問題にされていないようである」と指摘している。

そして「対話文における普通体の文と丁寧体の文との大きな違いは、話し手が聞き手に対して取る心理的な距離の遠近である」ことに注目し、心理的距離を近づけようとする普通体とそれを遠くしようとする丁寧体の違いがあり、丁寧体の時には「聞き手の内部世界に立ち入り過ぎることは不適切であるということになる」ので、「話し手の内部世界と聞き手の内部世界の異同に関する判断を表す『ね』と『よ』が、丁寧体よりも普通体の方に適合しやすい」と解釈している（1991: 105）。

ところがヨ・ネが丁寧さの度合いを低下させるという解釈には重要な例外があるとする（1991: 105）。

聞き手の知識のあり方に対する配慮がなされる場合である。すなわち、当該の事柄を聞き手が知っている、或は知り得る立場にあると想定される場合には、そのことを積極的に表明しなければならないのである。この場合、そうした配慮を施さないのは不適切である。

と述べて、「いい眺めですね」という用例を紹介している。

2.3.2. 日本語記述文法研究会（2003）

日本語記述文法研究会（2003）は日本語のモダリティも文法の一部として全般的に扱っている。それによれば、文は命題とモダリティというふたつの側面から成り立っており、「モダリティによって表わされる、命題に対するとらえ方、先行文脈との関係づけ、聞き手への伝達の仕方といったものは、基本的には、話し手の発話時における心的態度である。これがモダリティの意味的な要素となる」（2003: 3）。モダリティには評価・認識・説明・丁寧さ・伝達態度

というタイプがある (2003: 7)。

2.3.2.1. 終助詞ヨ・ネのモダリティ

日本語のモダリティのなかの「伝達態度のモダリティは、話し手が発話状況をどのように認識し、聞き手にどのように示そうとしているのかを終助詞によって表すものである」(2003: 239)。そして伝達に関する終助詞のひとつとしてヨを、確認・詠嘆にかかわる終助詞のひとつとしてネを挙げている。これらの終助詞の意味は以下のように定義されている。

2.3.2.2. ヨの意味

「『よ』は、その文が表す内容を、聞き手が知っているべき情報として示すという伝達態度を表す」。このようなヨの機能が端的に表れるのは、聞き手が気づいていない事態に対して注意を向けさせようとする文に付加される用法であるとして「あ、切符が落ちましたよ」という例文を挙げている。そして「『よ』の無い文は、話し手が気づいたことを独話的に口にしたというだけで、聞き手に注意を促そうという機能が感じられない」と述べている (2003: 241)。

2.3.2.3. ネの意味

ネの意味については、「『ね』は付加された文の内容を、心内で確認しながら、話し手の認識として聞き手に示すという伝達機能をもっている」として、その用法を3分割している。[話し手の認識として聞き手に示す用法]、[聞き手に確認を求める用法]、[聞き手を意識していることを示す用法]である。これらは文末に付加されるネの用法であるが、文中に現れるときの[間投的な用法]にも言及している。この用法は「話し手が聞き手を無視して一方的に話しているのではなく、聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示すものである」と解釈している (2003: 256-260)。

2.3.3. 滝浦 (2008)

滝浦は語用論の分野であるポライトネスを解説する『ポライトネス入門』のなかで、日本語の終助詞カ・ヨ・ネを扱っている (Chapter 6 [応用編]「終助詞「か/よ/ね」の意味とポライトネス」)¹³⁾。

滝浦は用法に関してさまざまに検討したうえ、ヨ・ネの意味素性についての仮説を提示している。すなわち、ヨの意味素性は[+話し手]であり、ネの意味素性は[+聞き手]である (2008: 137)、とする。そしてそれぞれの素性の意味を

「よ」の素性 [+話し手] の意味は “話し手の一方的言明” である。

「ね」の素性 [+聞き手] の意味は “聞き手への共有の確認・促し” である。

と説明している (2008: 138)。

3. ヨ・ネに関する筆者の仮説と検証

筆者はこれまで主としてスペイン語を研究してきたが、研究テーマの多くの場合、考察の過程には母語である日本語との対照という考え方を意識してきた。そしてスペイン語の諸用法を日本語の諸用法と対照するとき、文法的機能を考えるときも語用論的機能を考えるときも、発話行為の問題そのものよりも以前の事情に注目してきた。すなわち談話が展開される共同体の文化的背景のことである。この背景が、日本語とスペイン語（あるいは多くの西欧諸語）では、大きな違いがあることに気づき、日本という社会について、つぎのような仮説を提案した。ヨ・ネについても、その仮説に基づいて新たな仮説を提案したい。

筆者は Miyoshi (2012: 42-50) において、日本という社会に見られる 4 種類の特徴を提案した¹⁴⁾。まず、この社会の民族的均一性 (homogeneidad) である。つぎに、社会を構成する最小の単位であるが、それは、西欧の社会では個人であるが、日本では小集団であり (grupismo 小集団主義)¹⁵⁾、その小集団は伝統的に使われてきた用語であるウチに相当する。小集団の構成員は自分のウチに属する人と、そうでないソトの人とを区別して扱う。小集団であるウチは社会を構成する基本的な最小単位であり、その構成員は個人としての権利が薄められている (日本人は複数のウチに属するのが普通である。ウチは家庭であったり、職場であったり、町内会であったり、趣味のサークルであったりする)。また、その小集団という場もふくめて、日本では発話行為において相手中心主義 (alocentrismo) という特徴¹⁶⁾ が作用している。すなわち、話し手は聞き手を主たる位置に置き、自分を従の位置におきながら、協力して談話を成立させている。さらに、その小集団という場を含めて、話し手は聞き手との間に社会的な上下関係を意識しながら談話を進める (verticalismo タテ型体系)。ウチという小集団のなかでは、その構成員同士は多くの場合、対等の立場で接しあっていて、発話文も普通体であることが多いが、このタテ型体系という社会的特徴が作用しているので、ウチの人間が相手であっても、話し手はその人が社会的に上位であると認識する場合には丁寧体で話すのが普通である¹⁷⁾。

3.1. ヨ・ネの機能に関する仮説

筆者は、現代日本語の不変化詞ヨ・ネは、日本の社会で作用している小集団主義・相手中心主義・タテ型体系という特徴と深く関係していると判断している。まず、筆者のヨ・ネに関する仮説を提示しよう。

ヨ・ネは、文法的には助詞であって、間投詞・終助詞として働く可能性のあることが、2.1. から分かった。そして、現代日本語におけるこれらの不変化詞の語義は辞書によって異なるし (cf. 注3)、多くの語義では不変化詞を外しても文の命題的な意味は変わらない。そこには様々な語義に共通する基本的で統一的な機能があるはずである。筆者は現在、これまでに検討

してきた参考文献をヒントにして、以下のように考えている。

仮説1：ヨ・ネは、文法的には助詞（不変化詞）である。語用論的には、話し手が聞き手に対して、自分が聞き手のウチに属している人間であることを示す談話標識である。

仮説2：ヨは、間投詞的に使われる時には交話的（phatic）な機能¹⁸⁾を持ち、終助詞的に使われる時には聞き手に対して「この情報・意向をあなたの情報・意向のなかに加えてください」ということを伝える。

仮説3：ネは、間投詞的に使われる時には交話的な機能を持ち、終助詞的に使われる時には聞き手に対して「この情報・意向はあなたの情報・意向と同じです」ということを伝える。

これらの仮説については、以下の点を明らかにしておかなくてはならない。

a. この3項からなる仮説は筆者の直観的なものである。しかし多くの研究者の主張に触発されている。たとえば、伊豆原（2003）の共通認識領域には仮説3の終助詞的機能が対応し（2.2.2）、守屋（2006）の疑問点1・2や「共同作業への志向性」などには仮説1が対応している（2.2.3）。益岡（1991）の提示する「一致型の判断」という考えは仮説3と、「対立型の判断」という考えは仮説2と重なっているし（2.3.1.1）、ネの「疑似的一致型の判断」は仮説3の間投詞機能という表現で言い換えることができるであろう（2.3.1.2）。日本語記述文法研究会（2003）のヨの2種類は、仮説2の終助詞的用法と間投詞的用法に相当するし（2.3.2.2）、そのネの「間投的な用法」の説明は仮説2の間投詞的用法に相当する（2.3.2.3）。

b. 間投詞的用法と終助詞的用法が敢然と分かれているわけではない。間投詞的用法とは間投詞的機能が優勢である使い方であり、終助詞的用法とは終助詞的機能が優勢である使い方である。用例によって異なるが、それは文脈から判断することになる。

c. ヨ・ネという談話標識は、ウチの相手に対して常に使わなくてはならないものではない。文脈によって使うときと使わないときがあろう。話し手は自分のウチに属する相手にヨ・ネを使わなくても、普通体の文を使うとかで、相手の小集団に属していることを伝えることができる。

d. 話し手は、自分の小集団に属していない相手にも、ヨ・ネという談話標識を使うことがある。それによって、互いが同じウチに属しているときに感じられるような親しさを伝えることができる。

e. 話し手が聞き手に対して、自分が聞き手のウチに属している人間であることを示す談話標識として考えられる表現形式は、なにもヨ・ネに限らない。筆者の仮説に従えば、日本語記述文法研究会（2003: 239）が挙げている、ヨ以外の伝達にかかわる終助詞のヅ・ゼ・サ・ワなど、そして確認・詠嘆にかかわる終助詞のナも、「話し手が聞き手に対して、自分が聞き手の

ウチに属している人間であることを示す談話標識」としての機能をもっていることになる¹⁹⁾。

3.2. ヨ・ネの仮説の検証

上記の仮説は a priori に設定されている。その有効性について、さまざまな用例や指摘を検討することで確認してみよう。

3.2.1. 国語辞書的な意味について (1.1.)

本稿の1.1.で紹介したヨ・ネの語義を、この不変化詞に関する筆者の仮説から検討してみる。まず、ヨ・ネの辞書的な語義の種類は辞書によってまちまちであることがある (cf. 注3)。文脈情報によって語義が規定されている可能性が大きい。筆者の仮説はその共通の機能を提示するものである。また、文は命題とモダリティとで成立しているが (cf. 2.3.2.), 提示されているヨ・ネの辞書的な意味は、そのほとんどが、間投詞的なモダリティ機能が優勢な内容である。明白にそうであるのはヨ6 (感動詞) とネ7 (感動詞), そしてネ1 (文節末に現れる) である。また、例文はほぼどれも、ヨやネをはずしても文が成立するか、これらの助詞の付かない文で言い換えることもできる。発話者はヨ・ネによって自分が相手のウチに属していることを伝えているのである。それが文脈によって「親しみ」(ヨ2, ネ3, ネ4) と解釈されるが、反駁 (ヨ3) とかぞんざい (ネ5) だとか尊大 (ネ6) だとかと解釈されるときにも、やはり発話者は、ヨ・ネを使うことで相手のウチの人間であることを表明し、コミュニケーションの維持をはかっているのである。日本語の談話が話し手と話し相手との共同作業であることと関係している、極めて語用論的な用法である (cf. 注5)。

終助詞的な機能が優勢であると判断されるのは、ヨ2の語義とネ2の語義あたりしかない、ということになる。

3.2.2. ヨ・ネの使い方についての検討 (1.2.)

本稿1.2.で、ヨ・ネの使い方に関するいくつかの特徴を挙げておいた。それらを検討してみよう。

A. ネが命令形の文に付加されない現象：命令形の使用が西欧諸語と比べて少ない日本語の世界で命令形が使われるとき、それは目下のものに対してであろう。そういう相手に対して命令するときには単刀直入な発話でよい。まして一方的な命令という発話では、終助詞的な使い方では「この情報・意向はあなたの情報・意向と同じです」という気持ちを聞き手に伝えることとは矛盾する。発話者はウチの目下の者への命令表現において、自分が相手のウチの人間であることを確認する必要がない (命令形をソトの人間に向けて発話することは、特別な文脈以外では不自然である)。他方、ヨの場合は命令文に付加されることもあるが、それは話し手がこの談話標識を使うことで命令の発話姿勢を和らげ、相手とのコミュニケーションの維持を図ろうとする姿勢の反映であろう。

B. 同意を求めるネへの返答：ネで話しかけられたらネで答えるのが普通である、という指

摘である。筆者の仮説では、応答者が相手とのウチ的な関係を維持したければ当然である、ということになる。

C. 確認を求めるネへの返答：例文3の返答ではネが付かない方が適切である、という指摘があった。しかし筆者は、客が丁寧な人であったり、客とウェイトレスが顔見知りであったりすれば、客がネを付けて「はい、そうですね」と答える可能性も十分あると判断する。

レストランの客がウェイトレスに注文内容を確認された時の返答には、普通、相手はソトの人であるからネがつかない。しかし、客がネを使うことで親しみを込めて「私はあなたのウチの人間ですよ」という意味の信号を送ることは可能であろう。仮説に関する断りのd点を参照されたい。

D. 使用が奇妙に感じられるヨ・ネについて：例文6・7の応答の場合、ネが自然に使えるという指摘がある。これらの応答では当事者の間の関係が明示されていないが、その関係が変われば、答え方も違ってくるのではなからうか。たとえば、就職活動の面接会場の場面などではネが付かない方が自然であるし、親しい間柄の二人のやり取りならヨで答えることもありそうである。

ソトの関係にある相手に対しては、ヨもネも使いにくい。その使いにくさは筆者の仮説から十分に納得されるであろう。

E. ~ヨの文への応答について：ヨで話しかけられたとき、ヨで答えるのは不自然である。筆者の仮説に従えば、ヨを使うと、応答者が、教えてくれた相手の情報を、その相手に持ってほしいという気持ちを伝えることになるからである。

F. 任意要素としてのネの説明：相手が知らない情報にも付くネが任意要素と呼ばれることがある。例文9について神尾は仲間意識を表現していると、そして滝浦は相手の同意があるとみなす用法であると解釈している。筆者はしかし、店員と客とのやりとりでは、状況によって、つぎのネの付かない9'も、ヨが付く9''も自然であると判断するが、これら3種類の表現の間にあるはずの用法の違いが説明されなければ、例文9の用法に関する十分な解釈とは言えないであろう。

9' 「これ、おいくらですか？」 「600円です」

9'' 「これ、おいくらですか？」 「600円ですよ」

筆者の仮説に従えば、これら3種類の表現の間にあるはずの用法の違いを説明することができる。9'は商売っ気の薄いつけんどんな返答である（さらにデスをはずした、丁寧さの欠けた返答も想定できる）。そして9''は、上記のC「確認を求めるネへの返答」に準じた用法であり、客商売をしている人の、職業的な積極性から、相手をウチの人扱いすることによって、親しく接してもらおうという意図からの使用であろう。ネが付く場合には客に向かって「ご存知のよ

うに～です」というニュアンスの伝わることを期待される。そして9”のヨが付く場合には、親しく「～なんです（知っておいてください）」というニュアンスの伝わることを期待されている。

G. ヨの使用制限について：ヨは目上の人に使うと失礼になりやすい、という理解がある。どうして失礼になりやすいのであろうか。

それは話し手がヨを使うことによって、自分の情報を相手の情報に組み入れてほしい、という意図を表現するが、そのような意図を目上の人に対して伝えることが僭越になるからである。

筆者の仮説に従えば、それ以前に、ヨは原則としてソトの人には使わない、ということがあがる。しかしながら話し手は、相手が目上の人である場合でも、その人がウチの人間であったり、その人がソトの人間であってもその人間との間にウチ的な雰囲気があると意識されたりするとき（あるいはそれがあってほしいと願っているとき）、そういう相手に対して、情報や意向の同化を求めため、丁寧体の文にヨを使うことがある。仮説2のヨの機能を積極的に応用する場合であろう。

3.2.3. 日本語教育の現場の解釈について (2.2.)

本稿の2.2.で、ヨ・ネに関する日本語教育の現場の人たちの解釈を紹介した。それらの解釈と筆者の仮説との関わりを調べてみよう。

3.2.3.1. 大曾 (1986) の見解 (2.2.1.) について

ヨ・ネの意味についての大曾の解釈は、筆者の仮説と矛盾していない。ネが「原則として話し手と聞き手の情報、判断の一致を前提とする」という指摘は筆者の仮説3の終助詞的な使われ方のことになるし、ヨの「話し手と聞き手の情報、判断の食い違いを前提としている」という指摘は筆者の仮説2の終助詞的な使われ方のことになる。

さらに、大曾の「英語の会話」についての観察は興味深い。本稿の第3章で紹介した、筆者の仮定する日本語の「発話行為における相手中心主義」という特徴を、別の視点から説明していることになろう。

3.2.3.2. 伊豆原 (2003) の見解 (2.2.2.) について

ヨ・ネの機能に関する伊豆原の見解は、日本語教育の現場の経験から得られた貴重な指摘である。その内容は筆者の仮説と矛盾していない。ネについては「共通認識領域を作りだすもの」という解釈を提示している。この解釈はまさに筆者の仮説3の終助詞的用法と合致している。伊豆原はヨとネの機能を別のものとして説明しているが、筆者はそれらに共通の特性を指定して仮説を構築している。

3.2.3.3. 守屋 (2006) の見解 (2.2.3.) について

守屋はネが「談話や聞き手との関係性を構築し維持する機能」をもっていると述べている。この機能こそ、筆者の仮説1によって作動すると解釈していいであろう。日本語教員としての

守屋の言語直観も、筆者の仮説を支持してくれている。

さらに、終助詞の機能として、それが「談話構成を聞き手との共同作業としてしようとする志向性に支えられている」という指摘は興味深い²⁰⁾。終助詞の機能が日本語らしい発話姿勢に結び付けられていて、本稿の第3章で述べておいた、筆者の仮説に関する立論の基盤である相手中心主義の存在を暗示しているからである。

3.2.4. 意味の観点からの解釈につて

本稿の2.3.で、ヨ・ネの意味に関する解釈を紹介した。それらの解釈と筆者の仮説との関わりを調べてみよう。

3.2.4.1. 益岡 (1991) の解釈 (2.3.1.) について

益岡は、筆者の仮説の終助詞的機能が優勢である用法について、仮説2に当たるヨの意味を「対立型の判断」と、仮説3に当たるネの意味を「一致型の判断」と呼んでいる。そして筆者の仮説3の間投詞的機能が優勢な用法を「擬似的一致型の判断」と呼んでいる。

他方、益岡は、丁寧体の文では普通体の文ほどヨ・ネが使われないことについて「その理由がどこにあるのかはあまり問題にされていないようである」と指摘している。日本語ではソトの人には丁寧体の文で対応することを考慮すれば、そして筆者の仮説に従えば、その理由は明白であろう。このことは本稿3.2.2.のC・D・F・Gと同様の現象である。また、ウチの相手であっても目上の人なら丁寧体の文で対応するが、その場合でも自分が相手のウチの人間であるという信号を送ることがある。それが丁寧体の文に付加されるヨ・ネである。

3.2.4.2. 日本語記述文法研究会 (2003) の解釈 (2.3.2.) について

この文法書で説明されているヨ・ネの機能についても、筆者の仮説と矛盾する点は見当たらない。しかし次のコメントは加えておきたい。

発話の「あ、切符が落ちましたよ」についてである。ヨがなければ「聞き手に注意を促そうという機能が感じられない」と述べているが、そうであろうか。たとえば、前を歩いている人に向かってこの文を投げかけたとき、まず感嘆詞のアで発話の開始が伝えられる（誰かが声を出す）。前に行く聞き手は、それに続いて切符が落ちたという情報の声を聞くと、自分に思い当たることがあれば（切符を持っているはずなら）止まってその所持の確認をするなり、振り向くなり、するであろう。前を歩いている人に向かって発する声が「切符が落ちました」であっても「切符が落ちましたよ」であっても、声を聞いた人は、自分に思い当たらなければ振り返ったり止まったりしないであろう。声をかけること自体が聞き手に注意を促すという機能を果たしているはずである。その注意に応えるかどうかは、聞き手の判断に委ねられている。となれば、文末にヨが付加されているから聞き手に注意を促す、ということにはならない。

筆者の仮説に従えば、これも発話者がソトの相手に対して、私はあなたのウチの人間ですよという信号を送って親しみを表現するときにはヨがつくが、そうでなくてヨが付かない場合もあり得る、ということになる。

3.2.4.3. 滝浦 (2008) の解釈 (2.3.3.) について

筆者は滝浦によるヨ・ネの機能の説明に疑問を抱いている。

まず、ヨの「話し手の一方的言明」という説明が素直に納得できない。「話し手の一方的言明」という説明では、発話文がもたらすニュアンスとして、ヨが付加された場合と付加されていない場合の違いを把握することが困難なのである。たとえば、本稿の1.1.において紹介した今井(2011)の質疑応答の用例を見てみよう。例文35の応答文「私は日本人です」には、ヨが付加されていないが、これは「話し手の一方的な言明」にはならないのであろうか。そしてこの応答文にヨが付加されて、「私は日本人ですよ」となったとき、滝浦の定義では、ヨが「話し手の一方的な言明」という意味を表している、ということになるのであろうか。滝浦の説明には明確な意味が認められない。

また筆者には、滝浦のネに関する解釈にも納得できない点がある。滝浦にとって、ネの意味は“聞き手への共有の確認・促し”である。そして本稿のネ1の用法である例文「あのですね、ちょっとですね、朝から調子が悪いみたいなんですね」を挙げて、「話し手は、聞き手にとって新情報であることを承知の上で、自分が差し出す情報を聞き手の管理下にも置いてほしいと訴える」と説明しているが(2008: 145)、この説明が当てはまる使い方のネは例文の3番目だけであろう。例文の1番目・2番目のネが付加されている文節には差し出されるべき情報が含まれていないから、これらのネにはこの説明が通用しない。筆者の仮説のように、間投詞的な用法と終助詞的な用法を区別するべきであろう。

結局、ヨの場合、その意味素性が「話し手の一方的言明」であるということでは説明が付きにくい。筆者の仮説2に従えば、ヨの機能も無理なく理解されよう。また、ネの場合、本稿のネ1の用法である例文「あのですね、ちょっとですね、…」のネについて滝浦が述べている説明の不十分さも、筆者の仮説3に従えば補うことができる。1番目と2番目のネは間投詞的機能を果たし、3番目のネは終助詞的機能を果たしているのである。これらの点においても筆者の仮説の優位性が認められるのではなかろうか。

3.3. ヨ・ネとスペイン語との対照について

スペインは他の多くの西欧諸国と同じく個人主義の社会である。談話における発話者は自分を中心にして発話行為を展開する。発話行為の姿勢としては、日本の話し相手中心主義 *alocentrismo* に対して話者中心主義 (*yoísmo*) である²¹⁾。であれば、日本語の不変化詞ヨ・ネの機能や意味をスペイン語の表現に見出すことは、基本的に無理だ、ということになる²²⁾。それは西欧諸語の場合も同様であろう。しかし日本語をヨーロッパ諸語の世界の人たちに教える場合、対応表現はありません、では教育が成り立たない。類似の対応表現を提示しなくてはならない。

ヨ・ネの機能に関する仮説1は「語用論的には、話し手が聞き手に対して、自分が聞き手の

ウチに属している人間であることを示す談話標識である」ということである。このような機能は、スペイン語には求められないであろう。仮説2はヨについてであるが、「間投詞的に使われる時には交話的 (phatic) な機能を持ち、終助詞的に使われる時には聞き手に対して『この情報・意向をあなたの情報・意向のなかに加えてください』ということ伝える」である。そして仮説3はネについてであり、「間投詞的に使われる時には交話的な機能を持ち、終助詞的に使われる時には聞き手に対して『この情報・意向はあなたの情報・意向と同じです』ということ伝える」である。ヨもネも、間投詞的機能が優先される用法は、スペイン語の、話し相手の注意を引いて談話を開始する機能を持っている間投詞などが対応するであろう。そして終助詞的機能が優勢である用法は、ヨの場合には話し手が一方的に情報を提供している意味のスペイン語表現が対応するであろうし、ネの場合には、話し手が自分の情報について話し相手の情報との同一性を確かめるような意味のスペイン語表現が対応することになる。

3.3.1. 和西辞書の場合 (1.3.1.)

筆者が調べた和西辞書ではネだけが見出し語になっている。

小池ほか (2014) では、ネの文末用法で付加疑問の ¿verdad?, ¿no?, 文末の念押しに ¿eh? が挙げられている。付加疑問はネの終助詞的用法に対応するが、¿eh? はその間投詞的用法に対応するであろう。

有本ほか (2001) では文末の付加疑問の表現形式に ¿no es cierto?, ¿no es así? および文頭の ¿Verdad que...? が加わっている。これらはネの終助詞用法に対応する。また、念押し表現として文頭の ¿(lo) ves? が紹介されているが、これはヨの間投詞的用法に準ずる表現であろう。

上田ほか (2004) は、ネエが中心になっていて、それがネにもなる、という解釈に立っている。見出し語の「ねえ」は、少ない例文から判断すると、日本語の文頭用法のネを扱っているが、スペイン語の文頭表現として oye, mira, pero bueno, vamos a ver, hombre, mujer, venga, vamos, por favor が提示されている。これらは文頭のネの間投詞的用法に対応している。ふたつめの見出し語「ね (え)」は日本語の文末用法のネであり、相手の同意を求めたり、相手に確かめたりする使い方であるとされている。上記の2点の和西辞書では付加疑問として扱われたものである。上記以外の表現として ¿a que sí?, ¿a que no?, ¿vale? がある。これらの表現のほかに、「ねえ」のところに「表現をやわらげる」ものとして出されている ¿entiendes? も付加疑問的な機能を果たしていると解釈できる。これらはネの終助詞的用法に対応するであろう。なお、相手に確かめるための表現のなかに、creo que..., me parece que... が含まれているが、筆者の解釈では、これらは話し手独自の情報を提供していることから、ヨの終助詞的用法に準ずる表現であることになる²³⁾。

3.3.2. スペイン語の教材の場合 (1.3.2.)

日本語をスペイン語話者に教えるための教材でヨ・ネに対応するとされたスペイン語表現は、筆者の仮説を念頭に置くと、どのように解釈されるのであろうか。和西辞書にも見られ

た傾向であるが、一般的に、ネに対応するスペイン語表現は示すことができるが、ヨについてはその提示が難しいようである。

3.3.2.1. Planas *et al.* (1993) の場合 (1.3.2.1.)

Planas たちは、ヨについてはその説明文のなかで、その強調表現的特徴に注目し、例文では 20 (カッコのなか) と 24 で *hombre* を、そして 22 ではカッコのなかに *si señor* を入れている。しかし間投詞の *hombre* だけならば、ヨの間投詞的用法に準ずる表現になる。ネについては、説明文ではその対応表現を明示してはいないものの、例文の 25 ではカッコのなかに付加疑問の *¿verdad?* を入れており、例文 26 では文末に間投詞の *jeh!* を加えている。その意味を検討して筆者の仮説で説明すれば、*¿verdad?* はネの終助詞的用法に準じる表現であり、*jeh!* はネの間投詞的用法に類する表現である、ということになる。

3.3.2.2. Matsuura *et al.* (2000) の場合 (1.3.2.2.)

Matsuura たちの教材では、ヨについてはその表現内容の説明はあっても、例文の 27・28・29 では、それに対応するスペイン語表現は付加されていない。そしてネについては、例文 30 と 31 の文対応の例で *¿verdad?* を対応させ、そして例文 30 では *¿no?* を加えている。ともにネの終助詞的用法に準じる付加疑問の表現である。また、例文の 32 (*¿eh?*) と 33 (文頭用法のネで、*Oye, oye*) はネの間投詞的な用法に対応している。

3.3.2.3. AJALT (2000) の場合 (1.3.2.3.)

この教材では、ヨもネも文末に付加する用法にだけ注目している。ネについてはそれに対応するスペイン語表現として付加疑問の *¿verdad?* とその類義表現の *¿no es así?* が指定されているが、ヨについてはその対応表現が、例文 34 のように、提示されていない。

3.3.3. 野村の対照研究 (2014) について (1.3.3.)

本稿の 1.3.3. で紹介したように、野村は日本語のヨ・ネとスペイン語の間投詞との対応を、きれいな対照表にして我々に示してくれている (1.3.3.3.)。ヨ・ネの意味の分析は先行研究の結果を参考にして独自の解釈に従っている。また、スペイン語の間投詞については先行研究の解釈と共に実際の用例を分析して詳細な記述をしている。この表を筆者のヨ・ネに関する仮説の視点から検討してみよう。

文頭用法では、4 種類の意味機能を挙げてそれぞれに対応するスペイン語と日本語を示している。しかし文頭用法であることから、日本語のネ (あるいはヨ) は純然たる間投詞的用法であることになる。対応するスペイン語表現もほとんどが、文字通りの意味が薄まった間投詞として使われている。

文末用法では、6 種類の意味機能が挙げられている。そして 1 番目の「確認の要求」の時だけが日本語のネに対応している。その時のスペイン語表現には *¿verdad?*, *¿no?*, *¿eh?* が含まれている。前 2 者はネの終助詞的機能が優勢な用法に類する表現であり、*¿eh?* はネの間投詞的用法に対応している。

文末用法のその他の5種類の意味機能には、「呼びかけ語」以外の)スペイン語の間投詞はさまざまであるが、日本語はヨが対応している。スペイン語表現のそれぞれは、使われる文脈によって解釈が分かれそうではあるが、発話者が情報を提供するとき、話し相手もその情報を自分のものとして持つはずだという意味の *sabe(s), entiendes* (文字通りの意味はそれぞれ「あなたは知っている」「あなたは理解している」)あたりは、ヨの終助詞的機能が優勢な用法に近い意味を表していると思われる。そのほかのスペイン語表現は、筆者の仮説に従えば、間投詞的用法に準じていると解釈される。

4. ヨ・ネと対応するスペイン語表現に関する提案

上記のように、野村によって、ヨにせよネにせよ、その間投詞的機能が優勢である用法なら、文頭の位置を占めても文末の位置を占めても、スペイン語の多くの間投詞と対応していることが判明した。では、日本語のヨ・ネに対応するスペイン語表現として、スペイン語の間投詞以外の表現も考慮した場合には、どのような対応が考えられるのであろうか。筆者はこまめに検討してきた資料を参考にして、そして日本におけるスペイン語教育のことも念頭に置いて、以下のような対応を提案したい。

なお、以下の、いずれの間投詞的機能が優勢な用法にも、スペイン語の呼格の表現形式(「呼格語」*vocativos*)が対応する。

A. 文頭のネ(本稿での語義:ネ1,ネ7):間投詞的機能が優勢な用法。「ねえ」となりやすい用法。スペイン語でも文頭の間投詞などが対応する。それらは野村の示している *Mira; Oye* のほかに、*Pero bueno;; Vamos a ver;; Hombre*, などがある²⁴⁾。

Matte Bon は *oye* と同等の談話機能を果たす文頭表現として *Perdona, Disculpa* (文字通りの意味なら「許してください」)を挙げている(2005: 287)し、*Por favor, ~*にも言及している(2005: 288)²⁵⁾。これらの表現も文頭におけるネの間投詞的用法に準ずるものとなろう。

B. 文頭のヨ(ヨ1,ヨ6):間投詞的機能が優勢な用法。ヨ6は「よお」となりやすい男性語の用法。これに対応するスペイン語の表現は、上記の「文頭のネ」(A)の場合に準じる。

C. 文末のネ(ネ2):終助詞的機能が優勢な用法。代表的な表現形式は文末に置かれる付加疑問の *¿verdad?, ¿no?* である。付加疑問と同等の機能を果たしている文末表現には、ほかに *¿no es cierto?, ¿no es así?*²⁶⁾ や *¿a que sí?* (肯定文に付加), *¿a que no?* (否定文に付加), *¿entiendes?*²⁷⁾ がある。

しかし、スペイン語では文頭表現のなかにも、ネの終助詞的用法に対応するものがある。*Matte Bon* が扱っている *¿Verdad que ~?* (文字通りの意味は「~は本当ではないか?」)がそうであるし(2005: 304)²⁸⁾、文頭に付加される *Ya sabes que ~* (「あなたは知っている」)や文

末に付加される *como sabes* (「あなたも知っているように」) も対応しよう。

D. 文末のヨ (ヨ 3, ヨ 4, ヨ 5) : 間投詞的機能が優勢な用法。これには単純な *hombre* が対応する²⁹⁾。そして次の E の「文末のネ」に対応するスペイン語表現が当てはまる。

E. 文末のネ (ネ 3, ネ 4, ネ 5, ネ 6) : 間投詞的機能が優勢な用法。交話的な機能を果たしている。文末表現の *¿eh?* がそうであろう。また、この用法には上記の A 「文頭のネ」のスペイン語表現が対応するであろう。

F. 文末のヨ (ヨ 2) : 終助詞的機能が優勢な用法。この用法に対応するスペイン語の文頭表現に *Creo que...*, *Me parece que...* (「私は思う, 私には思われる」)³⁰⁾ がある。また、ヨの終助詞的な機能が相手に「この情報・意向をあなたの情報・意向のなかに加えてください」と伝えることであるからには、スペイン語表現の、たとえば *Te recuerdo que ~* (文字通りの意味は「私はあなたに~を思い出させる」) なども対応するであろう³¹⁾。

5. おわりに

西欧の語用論は発話行為の分析から始まっていると考えていいだろう。その発展段階のひとつに、滝浦 (2008) などが紹介しているポライトネスという視点がある。その出発点では、Face という社会学的な概念が導入され、理論の構築が試みられた。筆者は日本語の発話行為の背景である日本の社会的特徴について筆者なりに仮定している (cf. 3)。本稿では、日本語の不変化詞ヨ・ネの機能について既出の諸説を検討し、社会的特徴と直結する形でその機能に関する統一的で合理的な仮説を構築した (cf. 3.1)。そしてそれに対応する可能性の高いスペイン語表現を提案した (cf. 4)。ヨ・ネに関する検討が中心になったが、その結果に従ってスペイン語の対応表現を探ってみた。日本人にスペイン語を教える人たちに、そしてスペイン語話者に日本語を教える現場の人たちに、野村 (2014) を補う形で、なんらかの参考になれば幸いである³²⁾。

注

- 1) 日本語の簡潔な表現とその推論の可能性については、司馬遼太郎に面白い指摘がある。司馬が友人の韓氏を彼の事務所に訪ねて行ったとき、韓氏の娘さんが同席していた。その時の描写である。

「となりが、保育園なんです」

韓さんがいう。彼女はむろん既婚なのだろう。毎日、坊やをひきとりにくるときに、父君の事務所に寄るという習慣があるのかもしれない、そういう関係が、

——となりが、保育園なんです。

というひとことで鮮明になる。人間の言語というのは、そういうように簡潔に的確に語られると、聴く者の脳細胞が適当に体操をして、実に気持ちがいい。(司馬 1988: 198)。

司馬の指摘を待つまでもなく、言語による推論とは、言語の種類に関係なく、人間に特有の知的操作なのではなかろうか。

- 2) なお、本稿で論ずる内容は野田尚史教授の発表の内容にも今井 (2011) の内容にもかわりがないこ

- とをお断りしておく。
- 3) 現代語の語義に限ると、梅棹(1989)にはヨに7種類、ネに4種類挙げられている。山田(2007)にはヨが終助詞(口頭語。「主体の意思・感情・判断・意見などを強く相手に押しつけようとする気持ちを表わす」)で1種類、ネが終助詞としての3種類と感動詞の1種類の、合計4種類挙げられている。新村(2008)では古語と現代語の区別がつきにくい。
 - 4) 北原は「よう」という別の見出し語を立てているが、梅棹のように、この語義を見出し語「よ」の語義の中に(「よう」ともなるといふ断りと共に)感動詞として含んでいる辞書もあるので、便宜上、ここに含めておく。
 - 5) 日本語の談話は話し手と話し相手との共同作業によって成立している。そのことを筆者は「相づち」といふことばを通して論じた(三好 2014: 25-28)。森田の言う「人間的な言語」の意味は不明であるが、会話というものが発話する二者の対立的な立場で形成される西欧諸語との違いは大きいはずである。
 - 6) 金水(1993: 118)。
 - 7) これらの教材を調べる段階で、神戸市外国語大学の福嶋教隆教授に多大な便宜を図っていただいた。
 - 8) しかしこれらのスペイン語の強調表現は日本語の応答表現の「そうですよ」に対応するのではなからうか。
 - 9) 英語話者への日本語教材ではどのようになっているのであろうか。ヨ・ネとスペイン語との対応を検討する上で参考にするために調べてみた。Alfonso(1974)の場合、ヨを‘indeed’とか‘really’に対応させ、ネを付加疑問(tag question)の‘isn't that so?’などと対応させている(1974: 141)。Hamano *et al.*(2011)の場合も、ネは付加疑問に対応しているが(2011:45)、ヨについては発話要素としての形式は挙げられておらず、例文の末部にカッコのなかに入った(I am telling you)とか(I assure you)が付加されている。Tanimori *et al.*(2012)の場合も、ネは付加疑問に対応させられているが(2012: 270)、ヨは英語の文末に you know とか I tell you が発話の一部として加わっている(2012: 376)。なお、ヨに対応する you know について、益岡(1991: 104)は「自分の内的世界と聞き手の内的世界の食い違いがないことへの話し手の期待を表す」といふ見解の存在を紹介している。
 - 10) そのほかの間投詞は ves(21), verás(19), fijate(10), escucha(3)である。
 - 11) なお、vocativoであるが、野村は「呼びかけ語」と訳している。スペイン語の呼格の表現形式である(英語 vocative)。しかし間投詞の oye も mira も呼びかけ機能を果たしているため、それらと区別するためにも、この訳語には工夫が必要であろう(たとえば「呼格語」)。
 - 12) この語義が現代語の男性語であるヨ6となつて残っているのではなからうか。
 - 13) 本稿の2.3.1.で紹介したように、野村は、ヨ・ネの働きについて発表されたそれまでの説明方法のなかで、この滝浦の方法を高く評価している。
 - 14) Miyoshi(2012)はスペイン語で書かれているので、それを三好(2013)において日本語で要約して紹介しておいた。
 - 15) この社会的な特徴については、社会人類学者の中根千枝に従った。
 - 16) この特徴は多くの人が指摘している。日本語の豊富な人称代名詞の使い方を見れば、その作用の実際がよく理解できるであろう。最近では内田樹の指摘がある。彼は「他者との参照の中でしか、自分の立ち位置が決められないってのはさ、これはもう、日本を変えることのできない本性なんだよね」と発言している(内田・高橋 2014: 52)。
 - 17) ウチ・ソトの概念と普通体・丁寧体の使い分けの関係については、筆者は滝浦と解釈が異なっている。滝浦(たとえば 2008: 59)は、ウチの相手には普通体を、ソトの相手には丁寧体を使うというような規定をしているが、筆者は自身の言語生活の経験からも、そのような使い分けはなく、ウチの相手にも丁寧体を使うことがあると判断している。とはいえ、最近ではウチの構成員の間でこのタテ型体系の意識が薄れてきているという傾向が、事実として観察される。
 - 18) 池上嘉彦は井上(1989: 250)のなかで、日本語が言語として、指示的機能よりも対人的機能のほうに敏感に反応する、と述べ、談話においてその当事者間のコミュニケーションのチャンネルの確立ないし維持ということに向けられた言語使用のことが「交話的」(phatic)と呼ばれることを指摘している。

- 19) この点も、現在、筆者の直感的な仮説にすぎない。
- 20) 日本語の談話における「相づち」と関連していると思われるからである。本稿の 1.2 を参照されたい。「相づち」については、筆者は注 5 で指摘しているように、三好 (2014: 25-28) で論じておいた。
- 21) 本稿 2.2.1. の大曾 (1986) の指摘通りである。また、スペインに近い文化圏のイタリアで長期間生活してきた漫画家のヤマザキマリが、イタリア人の発話姿勢について、つぎのような興味深い指摘をしている (2013: 35)。「そもそもイタリア人には、他人に気を使い、相手を立てるといった価値観がありません。たとえば 5 人で集まってご飯を食べたとしたら、みんながみんな、口から泡を飛ばしてしゃべっている。とにかくしゃべるコミュニケーション人種なので、黙っているなんてありえません」。
- 22) 言語の対照研究では、2 種類の言語の表現手段が比べられるのであるが、そのような表現手段のほかに、両言語に間に共通の、特定の言語表現内容 (特定の意味や機能など)、すなわち「比較の第 3 項」(tertium comparationis) が設定される。しかし本稿のようなヨ・ネとスペイン語表現ではその比較の第 3 項の設定が困難である、ということになる。とはいえ、文法機能が異なる場合でも、たとえば肯定の返事という比較の第 3 項が設定できれば、間投詞である日本語の「はい」と副詞であるスペイン語の *si* は、対照研究の体裁を取ることができる。たとえば三好 (2014) のデータを組み替えれば可能になろう。
- 23) とはいえ、これらのスペイン語表現は、実際、日本語ではヨにもネにも訳される可能性がある。その場合はヨ・ネの間投詞的用法に対応する表現であることになろう。
- 24) 上田ほか (2004) のもの。 *mujer, venga, vamos* は、その使用頻度の低さから本稿では省略する。
- 25) この表現は和西辞書の 上田ほか (2004) にも含まれている。
- 26) 有本ほか (2001) のもの。 *¿no es así?* は AJALT (3.3.2.3.) にも含まれている。
- 27) 上田ほか (2004) のもの。 *¿vale?* は話し相手の了承を求めているので、ネの終助詞的機能とは異なるものとして、省略する。また、有本ほか (2001) の *¿(lo) ves?* も頻度が低いので省略する (cf. 1.3.3.2.)。
- 28) 有本ほか (2001) も含めている。
- 29) Planas *et al.* (1993) の例文 20 や 24 (1.3.2.1.)。
- 30) 上田ほか (2004) がネの対応表現として挙げているのもの。
- 31) 逆に、日本語のヨ・ネをスペイン語話者に教えるときには、まず、ヨもネも親しい相手に対して使う会話用の要素であり、相手が知っていそうな内容の発話文にはネが、相手に教えてやるような内容の発話文にはヨを付けることが多い、というような指摘をしたうえで、具体的な発話をいくつか提示して説明すればいいのではなかろうか。
- 32) 本稿では単独のヨ・ネを扱ったが、日本語にはその重複表現のヨネもある。この形式は押し付けがましいニュアンスを帯びている。その理由も筆者の仮説で説明がつく。話し手は自分の情報を相手にヨで提供して受け入れを願う、ネでその情報が相手の情報と同じである、と伝えているからである。また、重複表現としてネヨにならないのは、提供する情報の同一性を伝えながら、そのあとで受け入れを願う、という変な順序になるからである。
- なお、筆者は三好 (2012, 2013) などでスペイン語や日本語の「和らげ表現」(英語 mitigation, スペイン語 *atenuación*) を研究してきた。現在、その表現手段を 3 種類に分類して考える方法を提案している。(表現形式の意味を弱める) ほんやり型・(話し手の発話の主張性を弱める) 遠回り型・(談話の文から発話者やその話し相手の関わりを消そうとする) 隠れみの型である。日本語のヨ・ネは、筆者の仮説に従えば、話し手は相手中心主義に従っており、自身の発話の主張性を弱める表現形式になっていることから、遠回り型の和らげ表現の表現手段であることになるが、この考え方については稿を改めて提案することにする。

参考文献

- 有本紀明ほか (編) (2001) 『和西辞典 (改訂版)』, 白水社。
- 池上嘉彦 (1989) 「日本語のテキストとコミュニケーション」, 井上和子 (編) 第 7 章「日本語表現論」3,

- 245-266。
- 井上和子（編）（1989）『日本文法小辞典』，大修館書店。
- 伊豆原英子（2003）「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」，『愛知学院大学教養部紀要』，51（2），1-15。
- 今井邦彦（2011）『あいまいなのは日本語か、英語か？』，ひつじ書房。
- 上田博人ほか（編）（2004）『クラウン和西辞典』，三省堂。
- 内田樹・高橋源一郎（2014）『沈む日本を愛せますか？』，文春文庫。
- 梅棹忠夫（監）（1989）『講談社カラー版 日本語大辞典』，講談社。
- 大曾美恵子（1986）「誤用分析 1『今日はいい天気ですね。』—『はい、そうです。』」，『日本語学』5巻9号，pp. 91-94。
- 神尾昭雄（1990）『情報の縄張り理論』，大修館書店。
- 北原保雄（編）（2002）『明鏡 国語辞典』，大修館書店。
- 金水敏（1993）「終助詞ヨ・ネ」，『月刊 言語』22.4，大修館書店，pp. 118-121。
- 小池和良ほか（編）（2014）『小学館 和西辞典』，小学館。
- 佐藤喜代治（編）（1977）『国語学研究事典』，明治書院。
- 司馬遼太郎（1988）『街道をゆく 21』，朝日文庫（朝日新聞社）。
- 小学館国語辞典編集部（編）（2001）『日本国語大辞典』第2版，小学館。
- 新村出（2008）『広辞苑』（第6版），岩波書店。
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』，研究社。
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法4：第8部・モダリティ』，くろしお出版。
- 野田春美（2002）「終助詞の機能」，宮崎和人ほか『新日本語文法選書4。モダリティ』第8章（pp. 261-288），くろしお出版。
- 野田春美（2006）「日本語の終助詞について考えるために大切なこと」，国際交流基金『日本語教育通信』のコーナー「日本語・日本語教育を研究する」第30回（国際交流基金のホームページから検索）。
- 野田尚史（2013）「日本語とスペイン語のとりたて表現」，「外国語と日本語との対照言語学的研究」第11回研究会（東京外国語大学）のハンドアウト。
- 野村明衣（2014）『スペイン語における情報伝達の方策—スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析—』，神戸市外国語大学に提出された博士論文。
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』，くろしお出版。
- 三好準之助（2012）「スペイン語の和らげ表現について」，京都産業大学論集，人文科学系列45号，35-58。
- 三好準之助（2013）「日本語の和らげ表現について—『試論』の諸問題—」，京都産業大学論集，人文科学系列46号，1-28。
- 三好準之助（2014）「日本語の『はい』とスペイン語の sí について」，京都産業大学論集，人文科学系列47号，pp. 21-50。
- 森田良行（2006）『話者の視点がつくる日本語』，ひつじ書房。
- 守屋三千代（2006）「日本語の終助詞使用：日英対照の観点より」，創価大学日本語日本文学会『日本語日本文学』16号，pp. 19-32（<http://hdl.handle.net/10911/2930>）。
- ヤマザキマリ（2013）『男性論 ECCE HOMO』，文春新書。
- 山田忠雄（主幹）（2007）『新明解国語辞典』（第6版），三省堂。
- AJALT（国際日本語普及協会）（2001），*Japonès dinámico*，Instituto de Japonología，Madrid（原典 *Japanese for Busy People I* は1994年に講談社から出版）。
- Alfonso, Anthony (1974), *Japanese Language Patterns*, Sophia University, Tokyo.
- Hamano, Shoko et al. (2011), *Basic Japanese. A Grammar and Workbook*, Routledge, New York.
- Matsuura, Junichi et al. (2000), *NIHONGO. Japonés para hispanohablantes*, Herder, Barcelona.
- Matte Bon, Francisco [1992] (2005), *Gramática comunicativa del español: Tomo I (de la lengua a la idea), Tomo II (de la idea a la lengua)*, Difusión, Madrid.
- Miyoshi, Jun-nosuke (2012), *La atenuación del japonés —un ensayo pragmalingüístico—*, Editorial

- Académica Española (LAP LAMBERT Academic Publishing GmbH & Co., Saarbrücken, Alemania).
- Mizutani, Osamu *et al.* (1982), *Notas de nihongo 2*, The Japan Times Ltd., Tokyo.
- Planas, Ramiro *et al.* (1993), *Japonés hablado. Introducción a la lengua y cultura de Japón*, Don Libro, S. L., Madrid.
- Tanimori, Masahiro *et al.* (2012), *Essential Japanese grammar: a comprehensive guide to contemporary usage*, Tuttle Publishing, Singapore.

The Japanese particles YO & NE and their Spanish correspondences

Jun-nosuke MIYOSHI

Abstract

In the Japanese language we call 'particles' the affixial words which are grammatically invariable. There are several postpositional particles, which add to the sentence, at the final position, the meanings of order, wish, doubt, emotion, emphasis, etc. Among them we can find YO and NE. In this article we study, about these two particles, the meanings in a Japanese dictionary, some conditions of the usage, their corresponding Spanish expressions in Japanese-Spanish dictionaries, the Japanese language texts for Spanish speakers, and a contrastive research between YO & NE and Spanish interjections. Then we propose a reasonable and unified hypothesis on the pragmatic function of these particles. Finally, we present a new series of functional contrasts between YO & NE and their corresponding Spanish expressions, prepared on the basis of the same hypothesis.

Keywords: postpositional particle, interjection, allocentrism, discourse marker, UCHI-SOTO